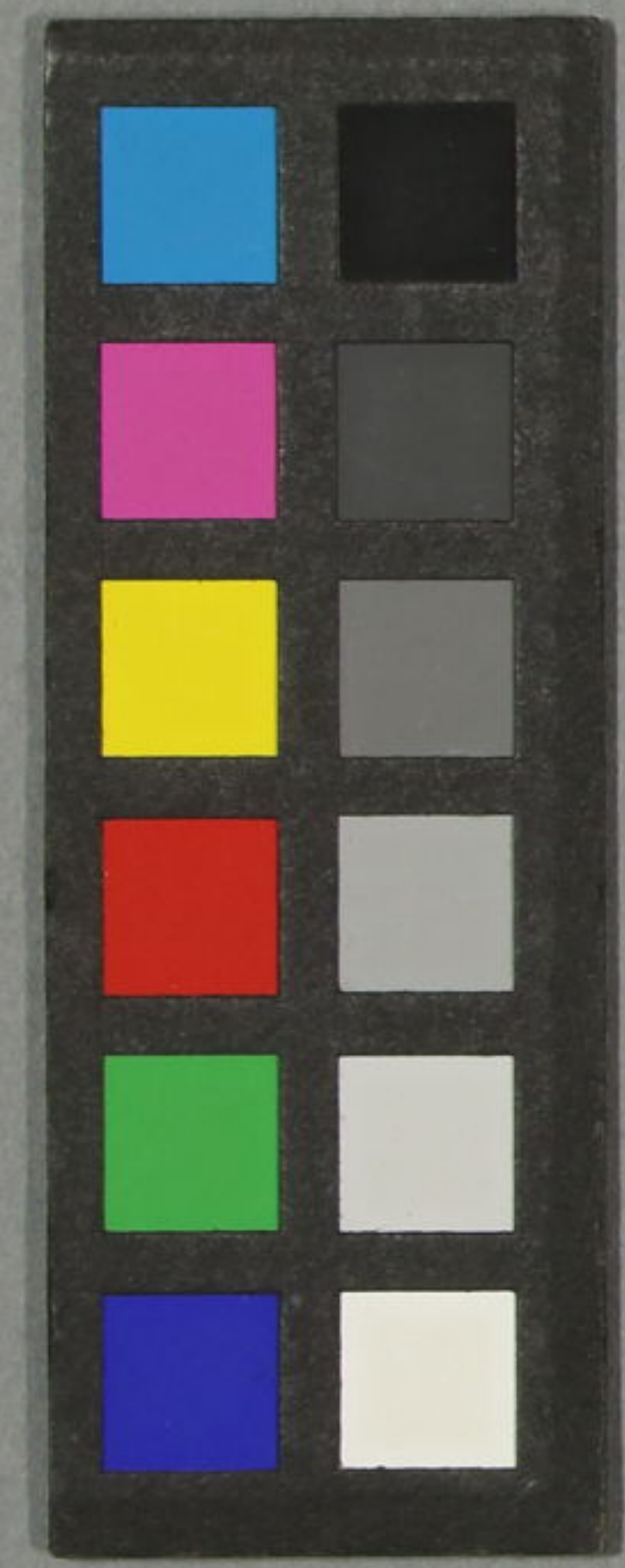


正史
實傳
いふは文庫
五

~13
4307
5



八13
4307
5

2
250
5



早稲田大學教育學部



16093

< 2000-341 >

いろはは文庫五編の序
 何きんての咲きあり梅の花と秋光
 庵の妙句を武邊の行烈を看あがりの
 吟なりとうわぶる記せいろは文字四
 十七士の銘傳ハ拙き筆ふ成といふを
 いづまかとうぬ忠臣義烈松の操能ハ

かむ雪間此梅の心さだしく咲かすり
 あまの花の枝まじりて梅の儀もほろほろ
 雪の望月の退口をうらうらぬ朝日影
 たうたの巻只鷹名和ふをまじりて静けき
 海の面千尋の底より猶深きそ志
 能功を感賞にふ最浅き撰者此

いろは五へんころー

硯の海さつと乾くもあましく退く年
 續く五番手六番手その寄を能く
 どんくと看官の法具負あつたりが
 大那と書房が欣喜そこの偏み
 願ふと云爾

東都作者 為永春水誌



上嶋門弥

此年十五文
父子とも小

大星が復

誓の金の

盟約をせぬ

退散あり

倉下り武家の
長屋小偶居せし
風与雪の下小名高



唄ひ女小助
縁より



本心を乱し賄ひの金を
選良小遣ひ持大星のり教
度参會の支を通達せし病
氣と偽り招小應せし門弥あり
父を諫け直大の怒りその家
復讐を考ふ小敵ハ容易なる
警微力を尽せざる及ぶハ大星

萬仕損ト云時ハ
別小同盟の者を棄
再び敵を祖ハ
汝も我言兼小皆ある
助當あり二言ハ
門弥のせひあり退き
けハ父小隨て孝を
守り忠美を
失ふハ武門の
道小わハと潛小
家を忍び出彼
唄ひ女を討果
自殺して死リを
示くハ柳文小

江助の妹ハ糸竹の考ニ小妻
 浪速の親族の家小成長
 今更の小唄
 妙小奏けれバ
 小東小
 伴ひ来り唄女小
 出扮せ本莊小
 借家ありて酒宴の
 席小呼且渡世とせし
 好色の師直身を傳聞て喜
 るまんと言入け且下も更小後
 けども強く抱入且度皆達て望
 け且是非あり屋敷引移り体
 聞者あり高野の様子を密
 江助言送りしとぞ



唄女
 小雛

相原江助宗房
 松屋五兵衛と夏名七結小切を賣



四合

恩故相思

今到東

是皆勇義

通物中

忠義



正史の乃は文庫卷之十三

江戸 為永春水著

第廿五回

収蔵の臣はらんよりひらの寧盗盗はまことと古人の金言きんげん
妙なるのみい俚俗の詞の言ふとまの親方思ひの主例しゅれい
夫侯物と名を付て格かくの賤しき公こうより一文かとの百旗ひゃくはたの
塩谷の老職夫居申右衛門藤江勝右衛門の両人の持物もちぶつも
品も安金をつねに結番了簡くらぬ馳走役の場入りばいりに



若君の御身のたよりと思はば只金銀をたよりにお得
なれど 悟齋が先ぬ立ち後身を若ぬとせしむる最
勝むべき似而非儉約をもく塩谷の滅亡の師直ぬ
阿らばしと夫居と藤江の兩人が所為不登りしと
也と未だを案ずる大星また我官の極小後の人の
批判をあるとを悔しけし諸も大星由まの助は度
主君の山後義を伴せしむひりと困えぬと聞
よりたより必落る新井新七率といふ者をほかり

由良 して其許の大後より此度鎌倉へ乞ひり一大
りの美を相勤めらるよたむの由利なれば
明羽まぐみ為地と登置一目もななく鎌倉の
山屋へ糸の矢居と藤江の兩人は對面の人
は書状を相とすしと言ひつゝ側へ近く我ませ
新七率も耳に由良の言ひ聞かむなり新
七率も早くとぞかまは合突がゆき早
路利の多も用金の某がより相とす

うらぐらぐとも糸忽いとこあるなト支度金しどがねとて十八兩
主君しゅきみの山用やまもちに二百支新七糸入しんしちいとひらさうつらう
尾おとく動うごりらまの 筋すぢ お目めがねとくひりまうと有難ありがたさ
たしらふに松まつ報はうととぞんとと相動あひうごちまはるをさぶらうり
まきうト慎しんんせ金かねとうけり我家わがやへ保たもつ積つみの用もちを
ふりて其翌日あしたの朝あさとちく藤倉ふとうらへとをさぶらうり又または
同意どういのごとく掛合かひあとを惣くわて由良ゆら之助のすけハ新七しんしち糸入いとひら
委あしく言こと付つけつらうとまはる先安まへやす心こころして目めをば
あ

寂さび早はやお役やくも首尾くびびよく相あまき君きみも山安やまやす陽やうに
むらうと目め出でた吉きち左ひだり右みぎの山やまとくつと待まちひけら
その所ところへ順じゆん分の境さかいの役人やくにんより先觸まへふれとてま
く早馬はやうま城門じやうもん際さかいゆを登のぼり高く山やまは進すすくと
うらう馬うまより飛とり 後あと ちりりぞんりまねと只今ただいま
藤倉ふとうら表おもてより早はやうらうの山やま注進しゆしゆんとを系けい々げげ右みぎ左ひだりの
押付おしつけはへト言ことをばより番士ばんしの順じゆん 重おもく藤倉ふとうらの早
うらうと元老げんろう方かたへ中なかつ達たつし侍さむらい候こうあるやうとまはるひやふ

田休良の三ノト没訪の七九龍を直の諸方へ知ら
世の使をるををの毛をらせる所へ又もをるを早馬
わりの中らんと城下の町人家中の一人一圓の物とら
うまを間もかく二夜目の三六城門へ急りつけあつた
大音のけ 二馬のけ うまをより早うちとて大星
瀬左衛門の只今邑へ到着せざるうまはよき
時に外廓の家の中も近き六圓つけ七好細のからぬ
發きまの各々山門へ放ちて案に頼るものをもる人願

かの境の早馬引はひて宙を飛する早うち城下の
人も兼せよう頼をかりするお家の重役原を味つ
元辰をなる龍の守護し七數十人大地を踏むる砂
畑の「エイサア」 「エイサア」 息をとりませし事も
むを早大勢のいきひひめて路へまげど余物なかり
ぬの肩ふおびの人はあしをさう入て城門へ飛ぶが
如くふをせせ約町家へ折用不出る家中の平生
あふごとくゆる周章 けしき用ひを捨てて我もごとく



文左衛門 二スハク 由良 此を我らぞと只今より 一刻も
早く鎌倉の巻下り 方野氏の落着をゆきけり
さ由良つて返さるる 只下等二人の海邊次第諸吉の
覚悟を相定めん 今日より 七老翁の面くらぬ殿の
筋切り物頭の前へ殺取と相守りて再攻の
沙汰を相結ばよ 又此家中の一同の武具の用
意は御断りあるまが 今日一旦退出の出来
ト言ひし事とて一同の宿野に帰るが是より

進の注進師直どのの御多き御養生の御作を
為り判官公に此切後の翌日まぐみ鎌倉の三
層を召らげらば諸森中たりぐむとくみ途
方を其の浪人と相なりたる執事を今より
彼よりも齒をくひあたる一家中を我ら運命の
尽くとも今更未練のおととて世よりの人の
物笑ひ臆病ののと言ひくみ澳よく討死して戸を
當城ひさるすとも忠臣の名を末世に残し温谷の

お家の終りませ君く^ま臣もま^ん道^{みち}毎^まて終^つて遂^す
 ち^ちと言^いひ^ひてせりて^ては^は勢^{せい}の^の報^{ほう}の^の奉^{ほう}公^{こう}の^の為^{ため}あ^あら^らせん
 ト互^たふ^ふ公^{こう}の^の令^{しやう}と^と同^{どう}士^しの^の鎧^{よろい}物^{もの}具^ぐ肩^{かた}の^の子^こ格^{かく}呼^よこ^こへ
 乞^こふ^ふま^ま城^{じやう}下^げ住^{すま}居^かの^の家^か中^{ちゆう}の^のと^とより^{より}在^あり^り所^{ところ}に
 住^{すま}居^かの^の後^ご人^{にん}埒^{あち}濱^{はま}役^{やく}所^{じよ}の^の人^{にん}と^とま^ま七^{しち}後^ご只^{ただ}鬼^{おに}も^もあ^ある^る
 一^い且^{かつ}の^の勇^{ゆう}氣^きの^の立^たい^い侍^{さむらい}氣^き負^お統^と城^{じやう}の^のま^まん^んと^と勢^{せい}の^の
 込^こんで^で赤^せ後^ごと^とあ^あら^らそ^その^の鎧^{よろい}引^ひ提^{てい}遣^{せん}と^と脊^せ負^おの^の城^{じやう}中^{ちゆう}へ
 我^{われ}お^おと^とう^うと^とを^をせ^せ入^いら^ら最^{さい}め^めを^をぬ^ぬし^しと^とど^ども^もあ^あら^らず^ず

第廿六回

再^{また}説^{しやう}塩^{しん}谷^や家^けの^の城^{じやう}中^{ちゆう}に^には^は後^ご代^{だい}原^{げん}頼^{のり}の^の人^{にん}と^とが^があ^あら^らる^るの^の
 交^ま交^まに^にて^て互^たふ^ふ公^{こう}の^の令^{しやう}と^と同^{どう}士^しの^の鎧^{よろい}物^{もの}具^ぐ肩^{かた}の^の子^こ格^{かく}呼^よこ^こへ
 遠^{とほ}く^くも^もあ^あら^らる^ると^とら^ら矢^やの^の用^{よう}意^い後^ご長^{ちやう}後^ごと^と今^{いま}に^にあ^あら^らる^るの^の
 あり^ある^るか^かう^うに^に強^{ちやう}ぐ^ぐが^があ^あら^らま^まび^びち^ちと^と寄^よ合^あふ^ふ、[、]傾^{かたむ}き^き
 候^{さう}と^と私^し欲^{よく}と^とを^をと^とら^らず^ず不^ふ忠^{ちゆう}の^のあり^ある^る物^{もの}頭^{あたま}の^の迷^まい^い交^ま交^まなる^る
 の^のあ^あら^らま^まば^ば倍^{ばい}倍^{ばい}必^{ひつ}死^しを^をま^まら^らわ^わし^し直^{ちやく}家^け燃^もゆ^ゆら^らる^ること^{こと}を^を
 重^{おも}役^{やく}の^の面^{めん}々^々ハ^ハ先^{せん}城^{じやう}門^{もん}の^の下^げ知^ちを^を嚴^{げん}しく^く言^い付^{つけ}出^で入^いの

者の油断せび又城下或ひは在る位居る在る家
中の面々が是れ集る名刺を記を殺入門外ありて名
刺をまづ入城候一名を討て居る所へ退くある家
中のかのをり居る者もまづなるに申して是れ覺
悟を志するがごとく用意して来る者三人ありて令
○岡野徳を夫 ○井関徳を勝 ○大岡林を夫
右の三人の塩谷判官の勘気せうけ七浪人しる者
ありしが武道の公がけ頼母しく故主の沙汰を願

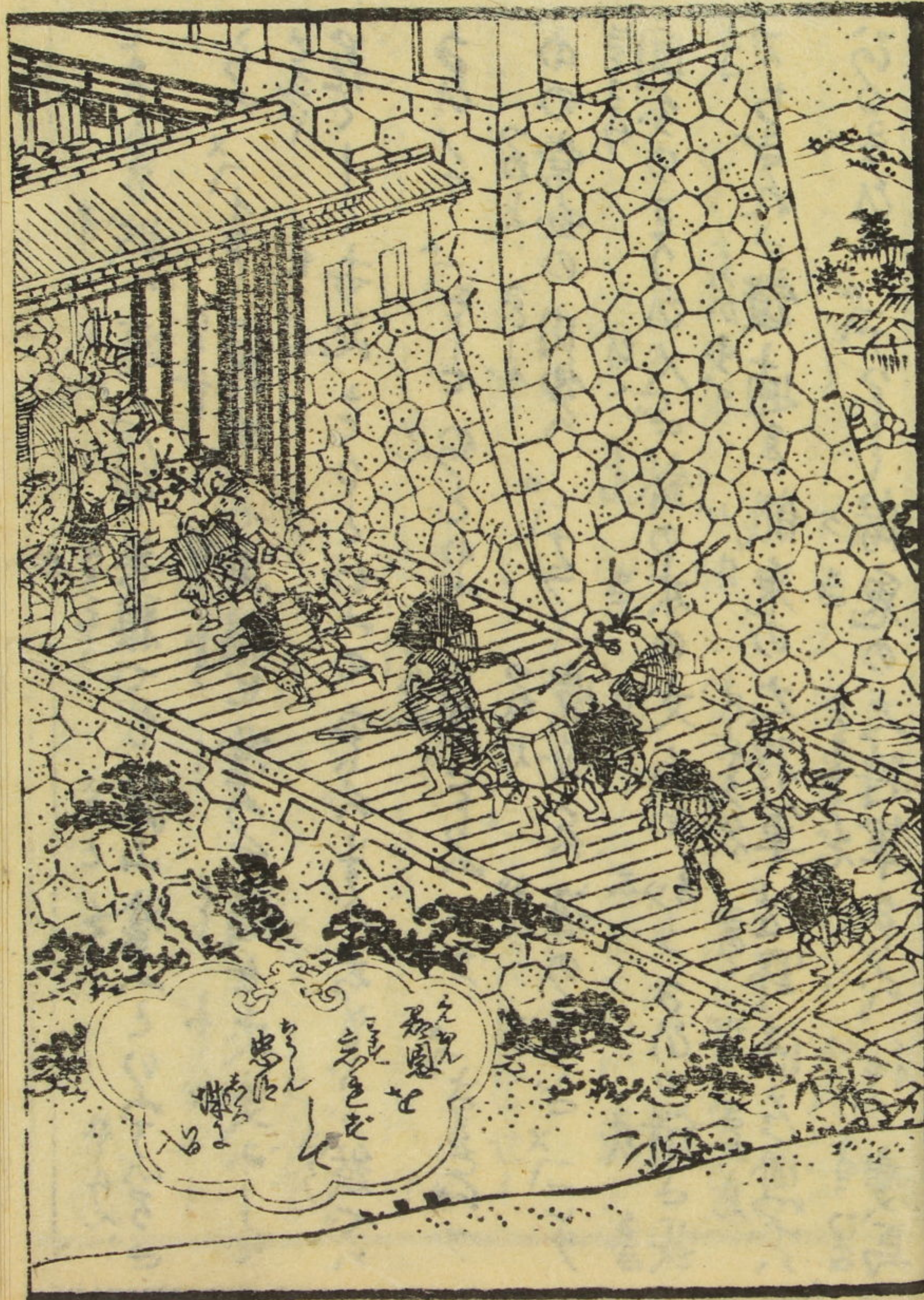
よりも筆隊の中小加つんと塩谷の城の門ききこ
なり姓名を名告てものうんと着刺帳へことひき
眼付イヤル入城のまま暫くおひ久るまじい内なる
ざうの通達するがごとく一旦浪人のひりるまじい名刺の連
は記しがふ存かすは大星どのの中付で先刺
く浪人氣の具へらまじいとも候く防りて入城を
いこす存は悉く歸りまじいまじい各々方も候か
毒まじい三人へるるやど由尤のひりあつてまじい松者も

必死の覚悟をせよ 柱一應の安を大里氏へ
お存けりませうと下さすいと思ひ極まり其面を多く
と歸る体なけり是非多く大里へ祈と告げし由
良之助が若衆より七夜公の侍一人門前出立
扱し七入城のより八雲く断り美公のわざを感心出立
あるよりとを三人の者へ金子と衣類とあり候所を
書留め後日小内景の執事を通しやるもあらんが先
まら今日歸るべしと理を尽し七言聞せけり六箇野

泣き涙を流し 今ふたねえ老の山仁公浪人の
便を失ふるを思へり此大變の中最中にこそこの
志をお捨下ささませと何れに如妙の賜作小あさぐひ
まうて有受のいさしきんか申評義の定り次升是非
とも小内景下さるやうに 三人へ小頼を入りませう
かろげおぞ降りゆく此時のみまき鎌倉の三層雲に
ありし家の中浪人し七身の後事を免や角と棄ト
煩ふその中にも忠義一途の人々の妻子を呼へ候所

おき遺物具携へてお國の城を死所とを及置りしる
忠臣義士同く時刻の系糸一城門の近付の家
中とひと初のお入顔見をねが相互に森相の
るもゆるんろと門番所はその由成せしを一人を改て
重級へ順達するゆゑ時刻うりておひれべ城下に
町人百姓追々おをせらりまりの用もあつた義士
兵隊は下さるよと村長里の長をえと軍刀のゆる
受らるる美くしく出立義具を携へる勇まげお組を

意てひんろく此時のらく貧しがき衣服を以て紺糸の
體のおど糸のゆるちぎれて古びたるを肩お引り
けりたものゆるも鼻の先を會沢その見苦しきを
よりの遠り言実や世間の人の悪むらびとも悪口を
古今の人情あるうへらるる今も悪口を預る浪人の余り
見苦し形どチチゆくとゆ人らる。一はまびサ飢死せきる



よりの城へ這入りて兵糧どもは山喰ふとのみりて
らふ。トイヤ、籠城と兵糧を喰つて腹を丈夫にして
花くしく赤死するものさぶまごちもどる然る
まひノサ、トぞとらとのみりて簡らふノサ、ト
の常世の肉を、トナラ、常世と誰のりごメノサ
関のころひ人ご鉢の本の文をわらうまのり清と長
乃ちぎれと鐘通と餓鬼の大將軍佐野源左衛門
ひるまひら、トア、餓鬼の大將軍さぶ、経が瘦馬

にもまらるのり餓鬼の大將軍さぶらう、トこれの宜
まひとのり簡のりねらの、トナ、悪のりなるで、らひ先
刺三人まら浪人が奇特とよひるを腹あみ金と
衣類をた下て降らさうまと安て又腹あみをせ
らつものり七近付とみ遠へね、トあるかどと宜のり
推量とイヨるのり常世とのり只今お召で、まかせう
ト異口おみぎけるを耳ゆもろけど浪人の門澤うか
隔、小高き所お腰うちらけ姑くひる人居るう、か

別願ふ城内へ入る姿を慕う見送るは奈何
ありけん見まらざりげあ在ける所へ城内うま
立流の竹小野寺す内なるうみ城下を見下して
今こそ是れ素より中不破勝右衛門どのの
ぬる元老大星の先刻より結うねらまじり
糸うまぬらト言は着河場の人も不破勝右衛門
どの不破氏と相違る夢城下の管さ人々四方を
あてはらねらまじり入是らう勇士の公居る

と互に見まらざり其折しも彼餓鬼と誇らまじり
依然として交り城門へ近付小野寺の舎敷
十内へ是れ勝右衛門どの大星氏の所存
大雲を圓まて外りたりさま及早速の
おむけ通のよふぞんじま及イザは同道
まて不破の肩身も廣く笑ひ誇り人々を見
くろくまら城内へ伴るまじりゆくやふらめ
人々も諸の先をまじり切めて身を隠せし

一の荒者不破。勝右衛門に七ありけるうと詰異口
増せり。初て大早の勝右衛門を兩三日城内へ止め
おき内この公底定まりし。後金子をわえ。竊うふ
内意をあらし。合せ先達せて孫倉の地へ下せし
こそ斯てまは城中に統城の覚悟をなさんと家
中の人々。廣間へ集まる。彼は輝髪とまる中に日
頃ハ武勇のかぐけ。才一たりと賞せしむ。日向
八十右衛門の如くせし。昨日我家へ降りし。よりか

教を見せ。其言は侍軍の者。怪しき。日向氏の
のこし。こころナ。一。荒早出仕の公。世をどまら。う。わ。と。か。り。し。こ
の。心。を。わ。ら。し。し。互。に。同。合。へ。その。中。に。分。れ。た。受。の。心。の
ひ。と。し。も。後。高。者。の。既。喜。し。ト。一。イ。ヤ。向。合。氏。の。命。の
くる。孫。倉。の。川。で。日。頃。の。勇。氣。も。ど。ぶ。る。ま。ひ。孫。倉。の。意
城。の。討。死。の。と。や。り。の。命。り。ま。は。な。孫。倉。の。死。の。心。の。同。が
つ。り。孫。倉。の。四。十。七。を。懐。ん。で。孫。倉。の。命。を。再。興。が
忠。義。の。一。物。さ。ら。が。し。く。し。と。わ。ら。の。く。お。勝。し。と。

實なる道理向時氏もよふふその了る筈で仕立を
甘ぬのう若さもあつた亡命せしむるにせしむるに
あざけり多から身勝手と言ふも公の余りなるべし
是を聞く愛むの若者二三人進丸刀で多より不
向時が宅へまかりて徳勝らき体もどぶく不達者の
見惚しめ付殺しと捨たまふへかきかたのりも
お終りなふ似合ぬ様あ者傍軍の面縁一物終
呉んと血氣の雨向時が宅へ色りゆき八十右衛門の

やれせしぞと言ひつゝ突へ端込と見まふに周を
家内中を引取り一突ぬ近落せもせしものうと終
あつた居間へ旅入りのちとらと見まふに徳を天井
より物も早の用意をとりてあり一ツツは物も
物身と様を構へつゝとせしは徳勝者とも思はれ
物所へ行しゆらるぞとあつた折しも向時六濱方の
運と取取あつたあつた海草のくまひ又へ田原の石
灰も田原の産する兵糧の手当を減下を落してあり

けるを向ひの車と言付候よき世に龍城の御
けあるるべき品を被是と先ありの車の教り十余車
暫時のる候へて城中へ引込をある人の公のつ
ざる用ま口めて候とも言出されねど必丸の覚悟勇士の
とまらむ吐一にむめ御世よお公の底へあらむはけを

正史 いろは文庫卷之十三了
実傳

正史 いろは文庫卷之十四
實傳

江戸 為永春水著

第廿七回

古人のまゝ夏ゆり婦人の其身を電する人の志に
容を控ひ士ハ己を憐む者の乃尔死をと言ひ
板谷判官寺貞ハ君長の後身云く殊小意電の心
奪く実情涼き性よりけは六道を守り最老常忍を
思ふぬハあらむまじきとも又ま性の好曲ハ主なる人の家来を

勝之物を賜ふがはりたりし主人終の知行の命を捨て
劫定に合はるると思ふまじもありしを然バ極谷
家の城を退去の時小隊んで主君の憤死を推量り
殉死せんと決する者二百六十余人ありしも血判
同盟の約小背く者責次第に多くありゆきを残る僅小
早余人を金鉄の忠臣義士を列傳の世の中の元人
既小なる所にして今又謂んもとより言ふに片岡傳久左衛門
孝房の一條ハ世に學ばざる異傳あり室も所ハ條

金ノ家法ヨリ公町ノまじしとるまで己年のこ
身を忍ぶは只屈竟と思ひ月池の流法洲小四藤ハ
遠き借家任主従二人の浪人なり頃しも秋の末つこ
本々の朝ハ紅葉して降る只肌も良寒く晴る貝空
青く之は面遠不真悦片帆出船入船級同るこ三航
野不のり以上総浦折る丁の一變小古々の懐く
流石の人情捨がこけ且六妻字のひき男つらん極さこ
近く座正考も七皇の片岡傳久左衛門の末より

阿比が正然とお見入りするやうに六宮うたてまてござり
おまはは是より精膳殿の御療治が行要でござり
まはあうしそ有難いひびきあるほど元辰さぬの余
程以切者もござりまはるや 片へて切者も上
とも是もまて願元居らまてても療治の勝をわると
いふ評判でござり今日ハ在宿を西列する 元へい左
様でござりかまはし何れも大勢お客がござりませうと
片へハテ強が来てござり何年此身も借方を出

歩行てせざるの指子も委しく聴き入りのご元ハいさめて
法修行も出来まはりのサ片へてまゝ然は及りのご
病氣の中も服くと赤後を考て家ありと由良と助
殿々右衛門殿ハ一對の大將ご大勢の取締の出来
りのハ使ゆらぬい武術と云い軍學と云い教再しひご
元へハ、原様の軍學ハ則は家老さぬとは用門でござり
かまはる片へハ、山々甚又左衛門の、高弟おやえはる
祿左様でござりかませうナア先達でお國元ごお城刃後



志の身も鷹取峠のお身配うら二の廓の備立の辨判
と道國までも堂々學が太そうであらうかまことわでも
右左傳つさぬのふと軍師の隨一ととヤとそふであら
かまはイヤまは左程とモウ目かろまはそふ秋の日
ハ少一のるも由新が成ませぬドレ方控の支度でも致
ませうト言るがう勝自の方へきて行西入日海系
も水色もくりの淋しき浦曲むま方の波風も身小
志とくと急れげきり抑は片圓ハ安福貝まんごうと

急のは皮の何も彼もさうぬ修よを鎌倉の飯屋
居まる不自由サ掃羅美の空行へ國も残せし片屋が
中助先助おね来て傳は右傳の浪宅のちうらと
夕つて暮させける斯る所へ門の口二三人の人喜して
ハイ並お頼をすまは片圓傳は右傳のさぬのお屋居ハ
此方でもごごかまはらト音信愛の圓へし此しと
元助ハ二階よりり何中用をたをるあや一向に

関内ねバ侍入在藩のさぶらう出 ハイ 権殿でござるまは
「且那さぬでござるかまをやらしく嬉しやハイ先助め
ござるすはお國元より新様さぬのお供をのこし
まゐりましくト言ひながら背後を振向つて新様振
は所が旦那さぬのお仮住居でござるまはお小兎
さぬがニサヤくお父上さぬお逢ひなせませぬと
言ひしを登りく片岡よりも表の方にて子供を
「母さん 爺公さんのお宅でありますかとサ速く

お遠入のさいヨウツのふとと侶供の片岡の妻に子の
門よりをり入る黄昏時の家内の体やご方様を
てさぬの不案内なる夫の家あると見へねど不
自由とあふせうする住居あり 傳の右藩の勢
権殿にて見せども見えぬら家の内同覺えなる
先助がさぬのさぬ今の上妻子を連れて國
許より居る、とよの合点の不行と思案なる
と懐しき妻子のひがひなり

妻や婢が染りこまうアアくたろく望でも洗ふて
此方へよすが買ひらるひは身へ眼病ひ人々暮
くく時明ぬま折の桐水もあつる吉望を洗つて
サアく此折へアアく貴公のお眼がまごそんなに
お悪うござるまはりの宛茶元辰さぬのお時で
お候方と兼りましくござるエ 庄へイヤる程先達り
見まはるゝく丈夫丈夫のつこの女へ然るを
ござるまはりのついでにまごを後の山椒屋を伺ひ

まはり宅にお懐りうそんなまはり多の不自由を
お入るまはりのついでに小瀬人が朝夕の酒席を
のこしと進まはり庄へイヤ食ひの外の用向の元助が
甲斐くく働ひて呉るからまはり少くもうま
るひて女へアア元助とお候ひるまはりの只今
供ふ連てまはりまはりとお別れの元助と同一名の
男をお入るまはりのついでにまはりまはり 庄へイヤ
かゝりまはりついでに元助もまはり考へるがら

片「ホニ元助の何と云うと云う元助とト母が二階より
見下ろす方燧を掲げて指子をつる元助が 元「はいと云う今燧の
はだをとりしと居りますとト言ひながら附来ぬ火を
掲げ方燧の務めて持来り片岡の内義お佐代を
見て 元「お風のお新様さうなておまはるまはる是ハ
二階ハ宜すおひりりなまはるまはる」と云うく此方でも旦那
さるがお眼の悪いので寔に心懸るをさるまはる」
ヤンと懐くや是くハ私もたまふ心強くなりまはる」ト

言ハ申お佐代が伴ひ子とも二人ハ侍入を清けつた
左の膝の側へまがり背く父の顔をつくりと云う
縁り子「お爺さんお眼が痛ふござるおまはる久子おち
ちやん病氣悪い久松子がお脊中を放りて退
まちやう久ト聞かして父ハ懐くさと又悲し
さもまた鏡曇りて見えぬ目と云う子をつり抱きおて
涙ながら片「二人とも温順な門と云う海道
中ハ孝外と云うマア母人さんと三人で居て様お

三月七休日をさるがよひお佐代も旅の芳で太
 後であらう遠路よりお出を出して休まるしやま下
 言のゆく二人の子どもの脊中板子の花より
 うと秋の雅面を見るふつけ古く思ふ思
 ぬえ小只悲しくさかまさるゆを物字四人が遠く
 のもにてあづらく視も途切ししが只そのまう
 にも元助が二人あまうりし異変さ八果う
 まを小不思義ありけり

朝鮮ぎやうめくわん 牛肉丸いふくわん 一色百銅いしきひやくどう
 名方なほう 脾胃ひいを補おぎなひ腎精じんけいを温ぬくむ大砂茶たいさぢや
 十包二朱じゅうぱうにしゆ

製弘呼 江下谷三味線堀 對列名表 深崎氏

第廿八回

古より形容両体けいようりやうたいなるを懸魂病けんこんびやうと名付たましくハ
 病びやうる奇病きびやうのよしとゆひゆふまども開ひらけ只此の本ただこのほん
 書しよ残のこしとあるのよしと眼前まのあたりに見みしとのふことを
 岐まにさきま倭よめ本ほんにもその健跡けんせきを正ただしく著あり
 たるを見みし夏なつなり但たゞし奇疾きしやく方に白人はくじんありてあきら

自ら形容兩人と有りて真像を別するをば上意なり
同今も善るありなり
是れ發魂病なり

硃砂 人參 茯苓

右の三味を濃煎して是を振せしむる氣爽あり

候中の形ハ消令元のひとりとなる事りと記して

あり思ふに病ハよりて形容兩人となるものハ只

形容ありの事にて言洛しなり是肝經の虛ハ能

邪氣ありと云如形ありと云ハ元助が二人となり

りる發魂病の類ハありて最ハ一まのり
然れども兩人の元助が互ハあはれあはれ
今來り一元助の格子町ハ法用ありとて
何れをかく出で行ハ家内ハ居る元助ハ猶
元にて飲食の調膳一人世話して働きたるは是
夫婦ハ之を以て同ハ思ふ事ハ一まはれ
元元助の怪しき体と云はれし一まはれ
烟元の物ぐるに特別と云の一 女

言ひても詮多しといふほどござりまはしが素名の宿を影たつと
六を助が疱瘡とゆう一時的モツ竹箒せうくとぞんド
ましくヨ珠の彩六と凄刃ていふ助ハまじふるのあふ
痛い癖いで下ふとそハ些とも癖だ
お医者さぬハ三人ま七葉をのりて呉ます廿八日
終し三の六教度うま度とふ元助が葉とふあよと
衆の目も遠はる者病して呉るを力に秘の氣を
たげますと神とさぬへ新物として大衆をうけ念々

屋のてら窓の外の外ふ令候しと顔の疱瘡の跡まはは
ア二人ともはねの連者とおあふ逢せまは六の役と
ありまたけきど窓の苦勞をいふますと
あことち夫ハア一役候んど極なものので安心でい
けきど旅の室で二人一夜の疱瘡とふまど難儀な
るをありとらう新六の方ハ歳上といひあ毒も多
ある等どのふとそ助の方が重病とふ極しこの
まふ人はいつとぬらひとヤレくるアお家の大衆を考て

まゝと命を捨つが故に妻も俱に死ぬるが
光を悔ひてひたひたに泣きども妻へのるの子供までも不
自覚たるうらけまめゆと有りゆくもやせん案に
らまをさるぬえ 女貴君のまゝに依りてお目が悪い
有りまゝにうらま 片イヤの根しこの斯うしとのよはひ
ひたひたの子に一ツも助うらぐは内癩のた病を夜
あつた藤治が出来うねると言ひまてけまどま藤治の
衆よものか朝のことたうらうらで泣きまぬぬくはれうら

よのごと互にふる一日のうらを落し合ふに聴ひて
あつた小耳がぬき言の葉とらうらまはあつたを
あつたも勇士も親子の恩愛妻とハハと受理あれば
子伝の養育病中の辛苦の程を妻の接授
彼は慰めまゝにうられ嬉し涙ごと憂思ひ物まで
ささるるむらりなりけとき元助ハ衣食の格をもち出
元ヤクは空腹まゝにうらまゝにうらまサアくはあも
君あがるものハあひけまどマアは格をもちうら



まゝ七十兩下さかまゝとぐ検物をとてけしきも子
どもの絶産の入用と還首の旅費のうらと四兩の
際もきひまゝとよ片づく然うであらうとも仔細して
子供とて言ひても二人の入用がうく容易いひんか
のの係の家老も三十金と云ひつゝ女ハ
まゝと云ふ為産の入用はと云ふ又又
小野寺さぬり向流さぬがまゝのり
に餘倉方の連中へ自當をきかるとやとるの七

四十四

二さかまゝ下言ひはく又も金子と二十八兩取
女ハ家敷と不用の品を賣掛りしりて
のの金子でござるかまゝに支るは
貸してあると云ふとこ十兩のお金を
まゝとて中まゝの存か
意儀の内浪人で候モ
由君金の十兩を箇紙の時
速廻りすて幾ら返り中
まゝとて中まゝの存か
意儀の内浪人で候モ
由君金の十兩を箇紙の時
速廻りすて幾ら返り中

がわまたが急の相違のこくねまたはるり先入両
お返す中また残金へ出精のこくねお返す中ねお返す
ませうト正直に持て来りこの家お前さんお方
ふさびお取らうひまきこくね後目お前さんお成を
思ひもぐしもお困を立退く私等を急略お思ひ
かくら僅僅もせぬ金を持て来り信切を感心
のこくねまきこくね西の金を清らりて十両の徳文
太事作お返してきりまきこくねト金を渡其片図の

片ハヤまの思ひかけるのこくねお返す中ねお返す
大をを事いお小実を働く者が城内おもある
のふは順分の中でお遠い所を知らぬ願をして居
ても海のおけ方の零落を聴ひて半金もくなく
返してお宅にお有るお心ざらぬ然く徳文を返してきり
あつた女へお上證支のこくねまきこくね願を済余お物
おら下りて旦那さんをお尋ね中またはるり先入
残金を支角とてお返す中ねお返す中ねお返す

どうぞ おま 実明の男と云言ひるから のま 隆の正直なる と ところへ
とうと元助が二人ある のま 隆の正直なる と ところへ
合意が不行で おま 女中三平 氣味の悪 のま 隆の正直なる と ところへ
れ入 おま 隆の正直なる と ところへ
うと おま 隆の正直なる と ところへ
私 おま 隆の正直なる と ところへ
大切 おま 隆の正直なる と ところへ
狸 おま 隆の正直なる と ところへ

四十四

どうぞ おま 実明の男と云言ひるから のま 隆の正直なる と ところへ
とうと元助が二人ある のま 隆の正直なる と ところへ
合意が不行で おま 女中三平 氣味の悪 のま 隆の正直なる と ところへ
れ入 おま 隆の正直なる と ところへ
うと おま 隆の正直なる と ところへ
私 おま 隆の正直なる と ところへ
大切 おま 隆の正直なる と ところへ
狸 おま 隆の正直なる と ところへ

兎つる 七人を使ふる 赤城の兵 三百余人の中
進者 小山のとき 初め 忠信は 似たりとも 後 仇は
室の 意なきの ことを 知らて 其実を 告げし 下 賤なる
ども 寺岡の 忠誠を 察し 憐れ 大りと 斗ふ
明智の いうと といへ 然る 其主君 判官の 徳意の
あはれを 不成と 知らぬ 人ある まで 師直の 會
怒と 知らざる 不明なり 鎌倉の 家老 矢居 江が
魯鈍 怪き 依て 不堪 ざるも 知る べし 是を 知らざれば

貞治十年

不明なり 荀も 貨と 知らざれば 身を 成せ
守り 外に あり 能ふ とも あり の 存 置の ごとく 小 徳に
たる 原ら 芦田の とき 才智の 者を 密に 鎌倉へ 下り
ある 金銀 賤帛を 持せ 加古川 本藏の とき 方便を
行ふ 高貞 殊甚 且 家形 絶え の ごとく 大 徳に
這ふ 意なき 似たり 偶 然なる 人 あり 似たり
り 被ま 後 辛万 苦の 公を 碎ひて 後 應言を 斗ふ
其身の 忠義 十載 小 賞を せし 判官の 汚名 なく

朽くちまるまるぐぐとと論ろんなり

云いゆるゆるももとと論ろんなるなる残ざん口こうのの兵へいとと好このむむ者もののの在あるる

評ひやうとと是これよりよりととまるまるるる南なんのの新しん田てん楠なんのの名なののと

庸よう愚ぐのの宜い利りをを形かたちののとと之これ蜀しやくのの孔こう明めいののと

玄げん徳とく天てん下かとと一いつ統とう世せいはは大だい星せいのの才さい智ち忠ちゆうはは古こ今こんに

去きょ類るいありありとともも由ゆ縁えん正せいしくしく仁にん公こう深しんききるる真まことのの家

只ただ一いつ時とき小せう亡ぼうるるととのの大だい凶きゆう變へんるるとと豈あま大だい星せい氏しの

難なん癖へきつつけけとと是これとと評ひやう正せいへへまま又また其そのゆゆをを以もつてて師

〇義士討活小日

直ちよくのの汚おと名な後ご世せいのの傳でん人じんをを流ながすすのの後ごをを教しやくをを差さ別べつ

ののみみくく天てん下かのの人ひとのの語ごりりつつけけとと城じやうをを築つくるる義ぎ士し

のの一いつ曲きよくつつけけとと隣りん人じんのの他たのの異いなるる才さい智ちののあり

氣きにに思しひひををするる所ところののありる家かののありる義ぎ士しの

真まこと跡あとののありるのの書かき状じやうのの写かきをを出だししとと本ほん文ぶんのの助すけとと其その

〇義士討活小日

家かのの森もり助すけをを流ながすすののありる存ぞん生せいののありるにに短たん牌はいととこ

ららとと麻あのの長なが延えんるるののありるよよりり一いつ黒くろ塗ぬのの金かね

母養才素子之
儀候も可然極
皆極江身教信

四十五

心之

富成助右衛門

午極月日



九
十
五
ノ
ノ

十二月十二日

降香川初平

宗利

延右衛門殿

利右衛門殿

小三郎殿

人々

○ け頭くさりのの書角たての横よこ及赤穂あかほの城しろ下した臺たい雲うん山さん花はな岳だけに

什物もののどくくりりとと義ぎのりり予よがが模も写しや望ぼうとと所ところハハ少すく

多おほく遠とほふももいいままとと大おほ概がひハハ相あ同どうトト只ただここ小こ書かき接つぎををいい

似にままとともも又また是こゝ本ほん文ぶん物ぶつ居ゐのの緒つづりり後のちのの姿すがたをを見みる

知しるる

○ 潮うしほ田た改かへとと書か八はち横よこ及及加か茂のぶ郡ぐん山さん條じょう村むらのの家いえ者ものははいいとと同どう也なり

加か古こ川がわのの本ほん陣じん中ちゆう彦ひこ守まもりりのの小こ旗はたのの書か状じやうをを今いまも

猶なほもも書か状じやうとと秘ひ藏そウすするるととやや加か古こ川がわよりより山さん條じょう村むら又また里さとありりま

武士の道とてなると我一筋に

思ひまねるみ出のやまら

早水藤左衛門乙川家のありく早水助左衛門の縁者なり

彼助左衛門の後浪人として能く古所光明寺に引取り居る

其の東の海邊を閑く藤左衛門と尋ね浪人の縁をとり

金子をとりて送り居ると居せしこと

勝つてその光明寺に送りし書状に

地ある火風空の周よりせし身の

たごらへ帰る年の修家に

第三十四

風間喜左衛門光延ハ垣元後の藤中よりける中堂又助

とふ人縁者よりけり六辞世を送りしこと

あはれびとぶからし藤の葉さらて

とと世の久くは春の曙

あり梅や園を突ぬくその白の

風も新六の死骸ハ中堂氏へ夢にて吊ひけるが喜左衛門

早水藤左

喜左衛門

重次郎

の妹伊津女との久古今稀なる女ありと実ある
然りしと云ふて其伊津女の母の法文章もいとむ
けむらふ軍一好むの人の慶とす

ふらち縁の親のころにうらねて猶悲しうら

□ 永十六年二月の初亡君の御志を傳へて幾

かく後切せむと聞けりおらふさうふ愛親とも

別ごき中に實に弓矢と身のおらひうらむ忠

孝義の道めて世の名を残しぬんとて武士の本

永十六年

貴き人と思ひ履めて

君が為てはむらさきのふの

命は捨てて名を残さん

中寺の清きなりしふ四十余人の人の増進のゆゑ

同る氏名風といふ人なりし名も見えざる者指の

人といふなりし人ハ師のつらうのさうりゆゑか

智識の傳を頼りて葬らるゝの處は所あるまじと居

つらうのたあるはる女かたとておせばもろく七

魂の地へゆきしを思ひて

そよりも外へゆきしを亡くぬの

其名へ見入ぬ昔の下水

車輦の代と格を立て墓前の橋へ光風と

書を降らしぬ

○櫻者春水曰右の古跡ゆく柳たるは新六の亡

骸八圓覚ちへ葬らばききぬ人懐は女も墓に

ふゆりしが煙傍も心づるもや但し地の傍の帯ひけるを

ちんは十五子

心より心で思ひて捨置しあり

一日二日あらうと或人の許より

ふげくるま外へ六つと亡魂か

空しきうらみさもあらはれ

帯ひゆる心ぎりの浅くむど思ふともあはれ

返す廿七日こそあやうき人指て

世とともあやうき月はうらやめ

入山の端よりうげは残して

三七日八藤乃のありて乃正四七日寺にて

野のまやその名くを書こけて

ひら蓮の人を見んと

おのり有りーそののい海流をどありけりか新六

光風の戒名を又摸唯劔とありー人々と同行ふ

舞翠霞をよせとありの有終まのふおのひを

了ー誕生十日十七日ハきりるのありて乃正北三日

今日八果の日は六あるも知ぬも貴族群集

乃正十五十三

速くもる月日多と光陰のうらも最ふな

了感方をあの人バ羨まふありーともあへが

羨の世り羨は見ることとふけ

ありーまらるや乃之ーおもうげ

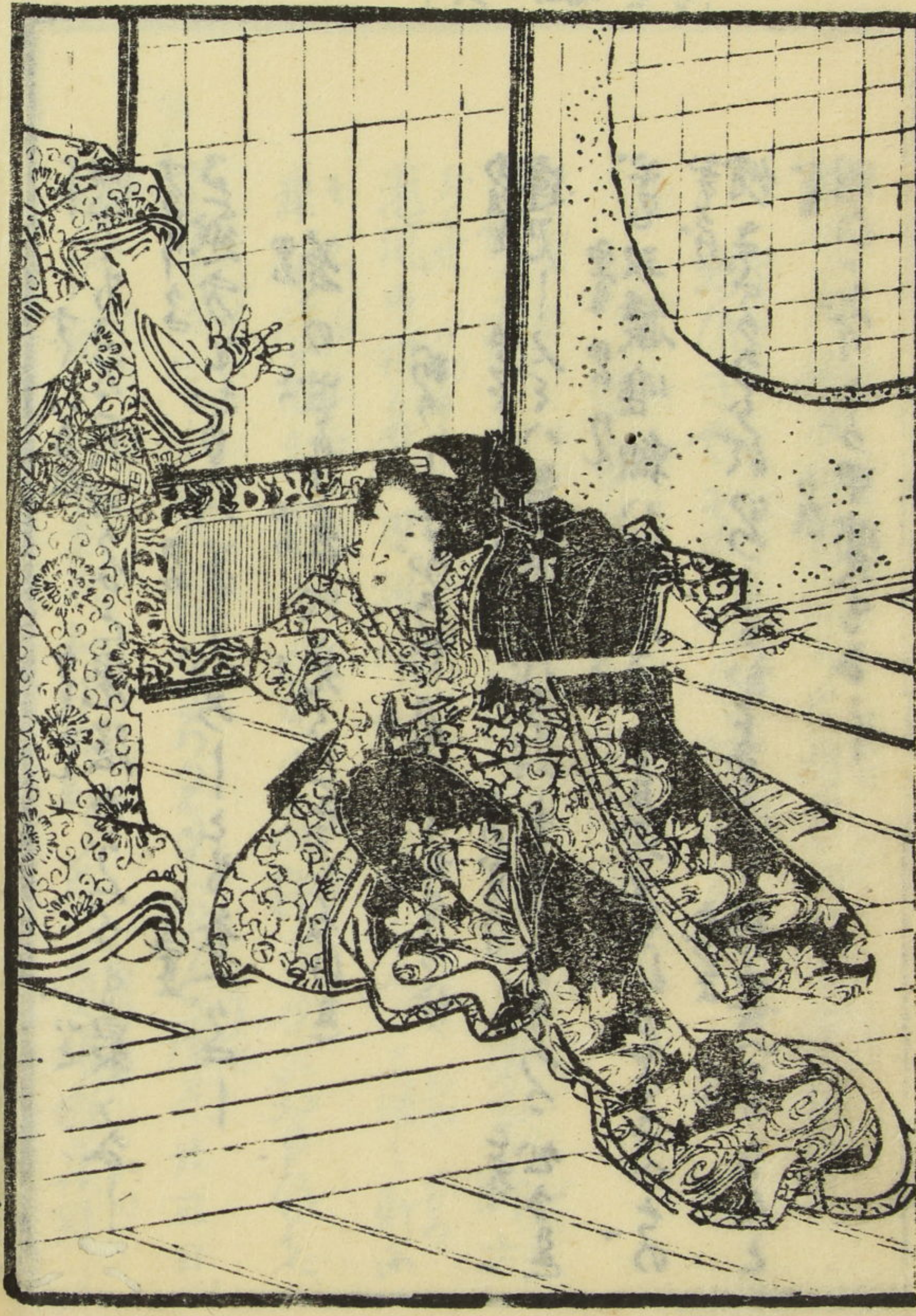
逢尼ー人々ハ墓行ふひ人バを侍もうらるか

も又換唯劔ハ見ぬるのまは羨に乃方さえとの

侍さるらるらびありーもまらるー吾妻へひのえんと

思ひとるら甲斐もる

乃正の世り
乃正の世り
乃正の世り
乃正の世り
乃正の世り



見ぬ人を忍ぶをちるまき苔のふ

そきぞとたまり 續もみり

逢ふりてを祈りけん ち早極

神ま今ハうらわりの世

四十余人の人々の法名の上は双とゆい字をすんて下に

劍と並みひいハ何事も双と拂ひ失ぬい人々や最

中うま

この章ハ猶長けきども器と七死まび又義士の法書に

稀多り又を小一奇説ありけりゆりくの義士傳江 地まを

尤實源あり

○延喜の系圖 今より八やと 隆泉寺所 里俗大老ト 本立山

長國寺といひ同蓮宗のちありその地内ハの西の方小寮

あり七賢了とよみ傍の修居一が此傍ハ立林唯七の傍

あり又其所よりやど遠くらぬ借家亦六十余支の尼の

懸くうらまるか後居七れくハ賢字の庵へ表修るあり

是るん立林唯七の妻にして桃村の節は只一大りの

秘客の役を勤りて支女あり

谷七々の所山路何所も物多かるべと本芽も眠る

後小言ひるる廿一丑満頃月ハを道ても降つ雪の

夜道の崎まうる光輝あつる園より八却てのめく

怖しく稀原も性果の人影なく犬さるるぬを淋しけと

寒の高野師直六寒氣ハ冷そ小多近く萩更で深

新へ入るるごと成度とそく雪原へ側女中ハ女抱きれて

通ひしが丑の上刺と思ふと二人の女中に侍るる縁側

巻十五ノ十六

傳ひて圓小行き兩戸を明きを子と洗ひ室を見よと

不も多と一老女の化粧ハとと冬月物

さくさくあつりけとどひ雲中月の景るるく風

雅な泳めて六のうり 中へ 四景の通りてとてのまは昔うら

のてととしまる仲秋の月影も曇りぐららるる海世の光

今宵の空が秋るる一入のまるととていませう 夜

風がの身ハ器つるうりませぬ さいや各月のまがふ

あぐ 空しくもるる下宵の酒をくまこと不寝や元来着

かろね身にまとも寐る糸の白雲垢さむらぬ公ハ福
者の癖きう庭のおが枝まぐの花実ハ月雪の三糸と
一時ふらむひるまじこと暫付極側ハ遊居のおりも
竹橋ハ女中が深き橋あり洞湯袴の蓋とよに
その極側より水濱の下へ取落其姿うつるおゆうら
ゆらりまぶさふよあてリシと洞のひびくせ合あめのごく
極側ハ藤よりまき出極側へひらきと花のづの直黒
出立の一人の曲者忽地刀を抜よりまき呼直あけを

打てりまぶさ呼直ハ藤天一まよらんとはる所を二人の女
中ハ左右より飛うらて呼直を引倒し押伏んとまきハ
藤の呼直身とひわり抱ゆけりまき声とまんとま
けま六二人の女中ハ周章々呼直の首ふまきつみ
一人の女中ハ呼直の胸ハまきとけりまき首とま
うとま付てまきハ呼直ハ早くお首をまきハサくまき
お付りまきとけりト言人も呼直の忍びの者ハ刀をぬる
透るまけまハ小聲にまき

まきハ

